
昔と今 昔は今 (銀魂二次小説です)

暇人?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昔と今 昔は今 （銀魂二次小説です）

【Nコード】

N6551T

【作者名】

暇人？

【あらすじ】

いつもどおりの朝、いつもどおりの万事屋にいつもどおりの会話
そんないつもどおりな事がこれからも続くものだと思っていた
夜に来訪者がくるまでは…

過去と今……

昔の自分が目の前にいる！？――

双方が交じり合うとき、何か変わるのか

→とかいっちゃってますが、そこまで暗くはないと思います
内容的には攘夷時代の銀さんたちが現代にきちゃったよ
それでだいたい原作にそっちゃうよ
的なものです

時間的には神楽がお父さんと帰っちゃうちよつと前あたりです

全然OKな優しい人は更新は遅いですが頑張って更新するので読んでください

無理…という人は戻って下さい

※受験生なので更新は遅いと思います
しかも不定期です

始まり（前書き）

※携帯で見たらとんでもなく読みにくかったので修正しました；
（ただ終止符付けただけorz）

始まり

時は攘夷戦争末。

昨日までいた仲間が明日にはいなくなっているかもしれない…。

もしかしたら、守れたのかもしれない…。

一度は掴んだ手が離れてしまうかもしれない…。

何の為に刀をとるのか、

何の為に刀をふるうのか、

なんの為に…。

今日も男達は戦場を駆ける。

時は移り、歌舞伎町へ。

今日も万事屋はいつもどおりの朝、いつもどおりの会話を繰り返していた。

今日も仕事は来ないんだろうなとそんなことを考えていた。（新八が）

「え、僕う!!?」

新八がなんか急に驚くが、周りは無視する。

このまま何も変わりのない毎日を送るのかと思っていた。
おやつの時間、3時まででは――。

「なんで3時なの…?」

3時までは…。

「だからなんで3時!？」

始まり（後書き）

残酷的な表現を含む可能性があります
といたいたいです、そこまで私に文才はありません
ほんとにありません
なのでそんなにかまえなくていいです
ギャグでいこうと思います

光（前書き）

※加筆修正しました；
読みづらくてすみませんでした

光

攘夷戦争――

今日、坂田銀時、桂小太郎、高杉晋助三人は別行動をしていた。それぞれが違う場所で天人を斬る。

戦争にでてからはいつも斬ってきた。

そう、いつも…。

金属と金属がぶつかり合う音、舞う紅…。

それぞれが敵に力強く刀を振るう、そのときだった。

「時空が…割れる…」

三人が同時に不思議な声を耳にしてすぐだ。

光が三人を包み、

消えた――。

歌舞伎町

万事屋ではある事件が起こっていた。

それは…、

「銀ちゃん、新八い、ケーキは私のものネ！」

ケーキ争奪戦だ。

事のはじまりはお登勢が客からもらったケーキを銀時たちにわけにきたこと

であった。

ショートケーキが4つ。

一人ひとつずつでまずそれでいい。

が、残りの1つをどうするかでもめてしまったのだ。

「銀さん、ここま公平にじゃんけんでいきませんか？」

新八がじゃんけんを提案するが、

「いや、ケーキは俺のものだ。だから誰にも渡さない」
銀時は拒否。

「ああ！銀ちゃんだめアルヨ！！ケーキは私のものネ」
神楽も拒否。

そのまま誰も喋ることなく沈黙が続いた。

く5分く

三人はケーキから目を離さない。

ショートケーキからいちごがすべて消える。

ん？すべて……？

「あああああ！！おい誰だ！俺のショートケーキに手えだしたのは
！！」

「いや、べつにあんたのじゃないからね」

「そうネ、銀ちゃんのとって決まったわけじゃ…ッゲフ」
あ？ッゲフ？

と、神楽を二人はみた。

「ん？二人してどうしたアルか？

私の口になにかついてるアルか？」

神楽の口元には少量のクリームが付いていた。

しかも自分で言っている。

二人は思った。このままじゃ全てなくなる！と。

その後、また沈黙がやってきた。

く10分く

三人はケーキから目を離さない。

だが、ケーキがさらに崩れていた。

「おいしい！なんで崩れてんだよ！！」

って銀さん、口になにか付いてるんですけど」

新八が一人大声を上げていると、銀時の口にクリームのようなものが

付いていることに気がついた。

「あ？これはあれだよ……」

洗顔のアレだよ」

また沈黙が訪れた。

いったいいつまで続けるのだろうか。

（15分）

誰もケーキから目を離さない

・

・

・

。

まだまだ沈黙は続く。

「「！！！！？？？？」」

「ケ、ケーキがない！！？」

今度はケーキがなかった。

かわりにあったのは……

大きな毛のある白い……白い？

「ワンッ！」

白い毛の正体は定春であった。

「「定春うううう！！」」

「あ……結局僕食べれなかった……」

光（後書き）

口調がおかしかったら教えてください
よくわかってないんです
ごめんなさいorz

来訪者1（前書き）

※ちょっとだけ修正しました；

来訪者1

夜になり、職務を終えた新八は万事屋を後にした。
その後数時間、銀時と神楽は居間でTVを観た。

そして就寝の準備をし、先に神楽が寝てから

銀時は一人、居間のソファアーの上でごろごろとジャンプを読んでいた。

時計の針は両方12を指している。

そろそろ寝ようと思い立ち上がろうとしたときだ。

誰かが玄関の戸を叩く音がした――。

「時はさかのぼって10分前」

（攘）坂田銀時と（攘）桂小太郎（攘）高杉晋助はゴミ捨て場になぜか倒れていた。

先に（攘）銀時が目覚ます。

「いつてててて……。 （攘）ヅラ、 （攘）高杉生きてますかー」

そう声をかけ適当に二人を揺さぶる。

すると二人は目を覚まし、自分達のいる場所に驚いていた。

「（攘）銀時…、何で俺達はゴミ捨て場なんか「いや、そこか？」」

（攘）桂だけゴミ捨て場にいたことについて驚いていることに対して（攘）高杉がつっこむ。

つっこまれた（攘）桂は改めて周りを見渡すとさきほどまでいた戦場とはちがうゴミ捨てば…

「ゴミ捨て場はもういいーッ」

そういつて（攘）銀時（攘）桂の頭を思いつきたたいた。

そんな二人のやりとりにあきれた（攘）高杉はあたりを見渡しある看板を見つける。

それは…
「よ…万事屋？」

来訪者1（後書き）

微妙なところで終わりです

意味わかりませんよね

誰も読みませんよね：

一応次からは台詞の前に名前の頭文字を入れたと思います

例

銀時⇒銀「

（攘）銀時⇒（攘）銀「

来訪者2（前書き）

いつ更新するかわからない不定期な小説で意味不明なものが、
受験も更新も頑張りたいと思っております

結構ミスタイプもするのでなにかおかしい点があったばあい指摘し
ていただけると助かります

今回も短いです

結構短いです

なぜかという、学校に行く前に書いているからです

※それから今回から台詞の前に各登場人物の名前の頭文字をつけま
す

来訪者2

(攘) 高杉が暗闇の中見つけたのは万事屋銀ちゃんという看板だった。

他にはないのかと探してみるが、自分達の周りに頼れるものは今は無かった。

時間的にもやっていないことはわかるが、一応(攘) 桂たちにもきいてみる。

(攘) 高杉「そこに万事屋ってえのがある。とりあえず行ってみねえか」

(攘) 銀時と(攘) 桂はとりあえず周りを見、自分等もそこしかないだろうと思い、行くことにした。

三人は万事屋の階段を静かに上がる。時間的にもそうだが、さきほどまで戦場にいたのだ。疲れてもいる。階段を上りきり、(攘) 高杉が戸を叩き、用件を話そうとした。が、

(攘) 桂「すみませーん、開けてくださーい。コマッテマース(棒読み)」

(攘) 桂に先を越された。しかも、戸をドンドンドンドンドンとか表現できないような音で思いつき戸をたたいていた。

(攘) 銀「すみませーん、開けてくださーい。タスケテー」

ついに(攘) 銀時までのりだした。そんな二人に少しキレ気味の(攘) 高杉が二人の頭を軽く殴り、戸から下がらせ「すまないが、頼みがある。出てくれねえか」と言いはじめたときであった。

戸が開いた――

来訪者2（後書き）

今回も意味不明なところで終わってます

あんまり話が進んでませんね…

いつになったらすすいと進むのか…

それは私にもわかりません

次で多分、銀時と攘夷3人組は会うと思います
きつと会うと思います

ありえないことはありえない？（前書き）

意味不明です

次の更新はいつになるかはわかりません

ものすんごい短いです

次はもうちょっと長いのでそんなに期待しないで待っていてください

※ちよつと修正しました；

ありえないことはありえない？

銀時 side

誰かか玄関の戸を叩く音がする。おまけに聴いたことのある声まで…。

あー…もうなんなんだよ…今日の営業は終わりだって…。

つかヅラかぁ？ヅラなのかこれ？てか、夜にうつせえんだよ！ツたく…。

めんどくさいが、時間も時間なので放置はまずいと思い読んでいたジャンプをテーブルに置き

玄関へと向かう。人数は3人か…。

銀「はいはい、今日はもう終わ…て、え？」

（攘）銀桂高「「え？」」「」

何が起こっているのだろうか…。

今自分の目の前に過去の自分と桂と高杉がいる。

夢か？これあれか？なんか暇な神様あたりが俺にみせてる夢か？

なあ、夢だよな…ほっぺたつねってみて痛かったけど夢だよな…？

（攘）桂「えと…、（攘）銀時、お前の兄ちゃんか？」

ありえないことはありえない？（後書き）

意味不明ですね

てか、短いですよね

あはははは；

次はもう少し頑張りたいと思います…

ありえないけどありえてる(前書き)

今日も意味不明な文が続きます

※ちよびつと修正；

ありえないけどありえてる

銀「え…っ…と…」

銀時はそのまま三人を外に放置するわけにもいかず、中に入れることにした。

もしここでいれずに真選組にみつかりでもしたら、たぶん高杉と桂だと思ふこの二人は危ないだろう。

とりあえず居間に連れて行き、事情を訊こうと銀時が三人に向かって口を開いたときであった。

（攘）桂「すまない」

すると向こうの桂と思しき人物が銀時に話しかけた。

（攘）桂「すまない、ずっと我慢していたのだが…」

その…厠を貸してはもらえないか」

何を言い出すのかと思えば厠を貸してほしいと…。

空気を読めとこの場にいる人たちは同時に思った。

銀時は（攘）桂に場所を教え、一応使い方も伝えて（攘）桂が出てくると、

今度こそは話そうと思いききたいことをきいてみた。

銀「で、うちになんの用ですか。それから何があった？これまでについて軽く説明しろ」

訊き方がなっていないとは思うがしょうがない。銀時自身なにが起こっているのかわからないのだ。

これまでのことを（攘）桂が説明し、今度はそっちがここがどこなのかと訊く。

それについて銀時も話し、最後にまとめに入る。

銀「戦っていたら不思議な声を聞いて、

まわりが光ったとおもったら

近くのゴミ捨て場にいた。

それでいいんだな」

そのことについて三人はうなづく。

（攘）桂「ここは俺達からすると未来であって天人が普通に町を歩いていると…。

で、目の前にいるお前は（攘）銀時だと…」

そのことについて少し間をあげるも、銀時はうなづく。

互いに持っている情報を交換してみたがあんまり詳しいことはわからなかった。

もう夜も遅いということで銀時は三人に向かって、

銀「今日はもう遅いから、とりあえず俺は寝る。お前らは適当にここで横になってろ。これからのこと

は起きてからだ。んじゃ」

そういい、寝室へと足を運んだ

ありえないけどありえてる（後書き）

ああ、実力テストがちかいよO r Z

居間（前書き）

こちらでも少し修正しました。

居間

(攘) 銀時たちは居間で適当に場所を決めて寝る場所を確保する。
明かりを消し、眠りに入ろうとするが

いろいろあったせいかなかなか眠れない。

ほんの少し前までは戦場で仲間とともに戦っていたはずだった。
なのに急に未来とおぼしきこの場へ飛ばされたのだ。

(攘) 桂「先ほどの男は未来の(攘) 銀時…か……。

俺達は未来へ来たのか、そんなこともあるのだな…」

(攘) 桂の口調は真剣だった。

(攘) 高「そうなんだろうな。まあ、詳しいことは明るくなるまで
わからねえよ」

(攘) 銀「…向こうであいつら無理してねえといいけど……。ま、
辰馬がいるから大丈夫か」

それはそれで心配なきもするが、やるときはきちんとやるだろう。

三人はその後数十分話し、

(攘) 桂「もう夜もおそい。今はとりあえず休むことにしよう」

(攘) 桂の言葉で三人はようやく眠りについた。

―朝―

新「銀さん、神楽ちゃん。おはようございまーす」

新八の大きな声が万事屋に響く。その声で居間で寝ていた3人は目を覚ました。

新「銀さん、神楽ちゃん、朝だよー……ってあれ…銀さんに桂さん？」

居間に入って新八が目にしたのはいくらか若い銀時と桂と誰かであった。

居間（後書き）

文がめっちゃくちゃですね…
成長しないorz

メガネの話（前書き）

※タイトルに深い意味はありません

お知らせです

6月は実力テストやら英検やら定期テストやらで時間があまりないため

更新があまりできないかもしれません。できるだけ、話がちよつとでも進むように頑張りたいと思っています。それでも6月の下旬、早くても中旬までは更新ができない可能性があります。

読んでもらっている身なのに更新もあまりできなくなるかもしれないなんて本当にすみません m（―――） m

メガネの話

新八side

僕はいつものように万事屋へ来ると、いつもと違う格好をした銀さんと桂さんそして誰かさんが居間にいた。

新「銀さん、桂さんおはようございます。えっと…そちらの方は…」

知らない人だ。きっと銀さんか桂さんの知り合いとかだろうと思い、名前をきこうとするが

(攘) 銀「…お前だれ？」

え…あれ…？聴き間違いかな…、

なんか銀さんが誰かに誰？つてきいたような…。

え？もしかして僕？

新「もしかして寝ぼけてるんですか？今日は珍しく早く起きましたからね。新八ですよ」

寝ぼけてたのか…？いや寝ぼけているのか…。

新「あ、それでそちらにいらっしゃる方はどちら様ですか？銀さんたちの知り合いですか？」

ききそびれてしまったのできいてみる。
すると

(攘) 高「高杉、高杉晋助」

新「高杉さんですね。改めまして、僕は志村新八です。銀さんたちのお知り合いですか」

(攘) 高「ああ、そんなところだな…」

高杉さんか…、ん…？どっかで聞いたことがあるような気が…。
まあ、今はいいか。

てか、高杉さん？と桂さんはと銀さんは居間でなにしてたんだろ…。
…。

新「で、銀さんたちは居間でなにしていたんですか？ 思い出ばなしとか…？」

まあ、昨日飲みに行ったらしいからそのついでに連れてきてしまったのだろう。

（攘）桂「すまないが新八：君だったかな。俺たちは君のことを知らないのだが…」

どこかであつただろうか…」

え？ どういうことだろう桂さん…？ 僕のこと知らないって…。

まてよ… 銀さんも知らないような感じだった…。

しかもよく見れば少し若いような…。

まさか…、

新「あの… 銀さんですよね」

メガネの話（後書き）

今回も意味不明な文をよんでくれてありがとうございます
更新頑張ろう！

しっかりしましょう（前書き）

読んでくれている方には申し訳ないのですが、更新がきちんとできるようになるまでもう少しかかります。来週の金曜にあるテストが終われば少しの間ですが試験等はないので更新が毎日とはいかないかもしれませんができるようにするかもしれません。

テスト期間中ですが、何もしないというのは嫌ですのでほんの少しだけ進めたいと思います
そして、いつもありがとうございます

しっかりしましょう

目の前にいる人物が自分の知る銀時や桂でないことに新八は困惑していた。

とにかくこれはどういうことなのか…？

一体なにがあったのか…？

そう考えている余裕が今の新八にはなかった。

もしかしたら自分の知る銀時がいるかもしれないと思い、いつも彼が使う部屋へ向かって

ふすまを開ける。

新「大変です！銀さん、起きてください！！」

ふすまのむこうにはまだ眠っている銀時がいた。そのことに少し安心しながらも布団をおもいきり引きはがす。

銀「なんだよ…まだ起きる時間じゃ 新「いや、起きろ！そして居間を見ろ！誰かいるんだよ！！」

銀「はぁ？誰かって誰が…

……………。あゝあ！？」

銀時は完全に忘れていた。

過去から来たかもしれない人たちのことを…。

銀「やっべ…」

しっかりしましょう（後書き）

ものすんごい進んでませんね…

いつになったら進むのだろうか…

それよりもほかの登場人物たちとどう絡ませようか…

うーん…

とにかく今はテストに向けて、受験に向けて勉強を頑張りたいとおもいます。

最後に、不定期更新ですが（今月は特にひどい；）読んでくれてありがとうございます。

互い（前書き）

お気に入り登録してくれた方ありがとうございます

それから更新と話の進みは遅いですが、読んでくれている方

ありがとうございます。

しばらく大きなテストはないので更新も少しかもですができるようになりました

相変わらずの駄文ですが、よろしくお願いします

互い

今には現在、過去からきた人たちとこの時代の銀時、新八、神楽がテーブルを挟んで座っている。

神楽についてはほんの先ほどまで寝ていたが、新八が起こしに行き殴られかけるも

いつもと違う雰囲気空気を読んだほうがいいと思ったのか、起きたのだった。

銀「あーつと…… 新八、神楽。あんまり驚くなよ、俺だってよくわかんねえし」

銀時の言葉に新八と神楽は目の前にいる銀時と桂に似た人物について彼もよくわからないんだとわかり、とりあえず驚かないということを決めた。

そのまま誰も口を開こうとせず数分が過ぎ、何か話題はないのかと新八が考え始めたころだった。

攘桂「では……こちらから話を始めてもいいだろうか。……実のところ、俺たちもなぜここにいいのかはわからん。詳しい話をしたいとは思うが、何を伝えればいいのか……」

攘桂は話し始めるも、何を話せばいいのかわからなかったようだ。だが、その言葉の裏にはもし目の前にいるのが本当に未来の銀時でもしも新八や神楽に過去のことを

伝えていないのなら……

それを勝手に喋ってしまったていいのかという考えもあった。すると

神「おまえ、絶対ヅラだろ。なんて格好してるネ。しかも

銀ちゃんそっくりな人とか連れてきて何がしたいアルか？

それより、今日はエリーどうしたネ」

何かに我慢できなかったのか神楽がいつものようにヅラに向かって

話しかけ、

攘桂「ヅラじゃな 神「しかも銀ちゃん兄弟でもいたアルか？私初めて知ったヨ」

「どういうことネ。隠し事か？隠し事なのか？」

攘桂はヅラじゃないと返そうとするも喋ろうとしたことを無かったことにされ、

神楽の疑問は銀時二人に向けられる。

銀「いや……いねえけど。知りたいことあるかもしれないけど、俺だって知りたいから。」

だからちよつともう少し落ち着いてはな 神「今までのみてて、銀ちゃんよりも私の方がもっと

知りたいネ。って新八が言えって目で訴えてたネ」

新「訴えてねえよ！……まあ、知りたいとはおもいますが。あの、とりあえず自己紹介からでも始めま せん？」

急に何かを話そうとするからうまくまとまらなくて話せないんですよ。じゃ、僕から——」

なんかかんやで新八が仕切ることになった。しかも自己紹介……

新「改めて、僕は志村新八です。えっと……」

神「神楽アル！ちなみに新八のことはメガネでいいアル」

新「よくねえよ！！」

次は——と新八が進めようとする

銀「……万事屋やってる、坂田銀時で……す……？」

なぜ疑問形と新八は思うがとにかく進めようと思ひ向かいの人たちをみた

新「えっと……じゃ、今度はそちらから……」

そういつてから少し間があったものの

攘桂「……桂小太郎」

攘銀「坂田……銀時……」

攘高「高杉晋助」

新八と神楽は最初に言われた驚くなという意味をここでようやく理

解
する。

互い（後書き）

意味不明

それ以外にこの作品を表せる言葉はないと私は思います

結論（前書き）

5月下旬から初めて
テストとかやって更新しなくて
章？も10はいったのに：
うゝん：

そういえば前回

（攘）と付け忘れてましたね；

結論

（攘）桂たちからの自己紹介のあと銀時は夜によくわからないがうちにきて

誰かと思ったら過去の自分と桂であると言えることだけは新八と神楽に伝えた。

新「過去からですか…そんなことってあるんですね……。あ、でもそしたらこの人たちどうします？」

行く宛もないだろうし……」

神「過去からきたアルか!?!にしても、過去でもヅラは髪が長いネ」
どうやら神楽は新八の話をきいていなかったようだ。

とにかくこれからどうしようかと考えていると

銀「新八の家でよくね? 広いし…」

とか言い出した。別に広いからそこに居させるというのもわからないくもなかったが

新「いいんですか、銀さん……毎日姉上のあの卵焼きですよ……」

銀「……だだだ大丈夫だって、過去の俺と高杉はダメかもしれないがヅラだぞ。大丈夫だ……」

…たぶん」

新「……たぶん、じゃだめなんだよ! あの人たちに何かあったらどうするんですか!」

ということでは新八の家は厳しい。

となると

神「万事屋にコイツら置くのはだめアルか? それはそれでなんか面白そうネ。」

だから銀ちゃん、いいアルか?」

ここ、万事屋か…

それとも下のお登勢に頼むか…

銀「はあ? お前わかってんの? うちはこんな奴ら住まわせられるほ

ど金はねえっての」

どうやら無理そうだ：

だが：

神「もういいネ…。おいそのヅラ、なにか銀ちゃんの恥ずかしいはなしはないアルか？ じゃないと

その髪引っこ抜くぞ」

どうしても神楽は3人をここに置きたいようだ。なぜかはわからないが……

（攘）「銀時の恥ずかしい話か……。あ、これはどうだ！ ゴニヨゴニヨ……」

銀&（攘）銀「勝手に話すなっ」

恥ずかしい話を神楽にし始めた（攘）桂に銀時と（攘）銀時は殴りかかる。

神「ひどいネ……。グスッ……。もう少しできたのに……」

神楽はものすごい気になっていたようだ。

新「あーもう、二人とも落ち着いてください……。高……。杉さんも見てるだけじゃなくて止めて

くださいよ」

今まで空気と化してした（攘）高杉に新八が声をかける。

（高）「ったく、お前らしい加減にしろ。話が進まなくなるだろうが」

そう言って騒いでいる銀時二人と（攘）桂の頭を叩く。そして三人はもとの位置にもどり

話をまた進めることになった。

銀「たつくしうがねえな…。お前ら三人よく聞けよ、ここに居ていいから余計なことはするな。

それと」

銀時が彼らを万事屋に置くことを決めた時だった。部屋に呼び鈴が響き……

桂「銀時くーん、いますかー？」

桂がやってきた。

結論（後書き）

さてと、どう進めようか…

てか、まだこの話のなかでは24時間たってない…

どんだけ長引かせるつもりなんだ私は…

ヅラ（前書き）

めちやくちやですね…
はあ…

注…誤字を発見しましたので直しました；

ヅラ

万事屋に呼び鈴が響く。

桂「銀時くーん、いますかー？」

桂だった。

(攘) 高・銀「……え、ヅラ……？」

(攘) 桂「ヅラじゃない かつ」

(攘) 桂がいつものアレを言おうとした時だった。

玄関の戸が勝手に開かれる音がし居間にエリザベスを連れたこの時代の桂が入ってきた。

銀「ってめ、ヅラ！勝手に入ってくんなよ！！」

桂「なんだいるじゃないか、銀時。なんで出てくれなかったんだ」
そう言っ桂が目線をすこし横にずらした。(攘) 桂と桂の目が合う。

桂「これは――… どういうことだ銀時、リーダー、新八君。仮装パーティーしていたなら呼んで

くれればよかったのに 銀「ちげえって！どこをどう見たら仮装パーティーだよ」

桂は仮装パーティーだと思っていたらしい。するとエリザベスが看板を取り出し

エ『桂さん、この人たちの服装おかしくないですか？』

と問いかけた。そう言われもう一度彼らを桂がみる。そして数秒動かなくなっかと思ったら

桂「まさか…俺…なのか……？」

と小さく呟いた。それは本人には呟いたくらいでも周りにははつきりと聞こえていた。

(攘) 桂「その… なんかすみませんでした」

なぜかその反応に耐えられなくなったのか(攘) 桂が謝り始めた。

(攘) 高・銀「(何謝ってんの、コイツ…)」

このままだとまた話が進まないと思い新八が

新「桂さん、どうやらこの人たちは過去から来たみたいで、

それで、今日から万事屋に泊まることになりまして……」

今までのことを簡単に桂とエリザベスに説明する。

説明が終わると桂は銀時に向かって

桂「銀時、ここに居させることに何も反対しようとかは思わないが

過去のお前はともかく、過去の俺や高杉が

真選組に見つかりでもしたら過去の俺等やお前が大変なことになるぞ。その時はどうするんだ」

桂は彼らや銀時のもしもの時について心配していた。

銀「まあ、親戚とかなんとかいって誤魔化せばいいんじゃない」

そう誤魔化すと考え、そうかと桂が頷いた。すると、

（攘）高「なあ、真選組ってなんだ」

（攘）高杉から質問が上がった。

ヅラ（後書き）

桂出てきたけど
話はすすまず：

特に何もない（前書き）

はあ…

最近暑いですね…

もう朝学校に行くと、帽子とかかぶってないんで頭に熱が…
それで汗がもう大変…

特に何もない

真選組とはなんだと（攘）高杉に訊かれる。

新「簡単に言えば、此処江戸の町を守って…多分守ってる人たちのことです。」

悪い人達じゃないですよ」

桂「そして、いつも俺は追われている」

最後の桂の言葉に「は？」と意味が分からない顔をする。

新「ま、まあ…ほんとに、そそそんなに悪い人達じゃないんです。ってか桂さん

余計なこと言わないでくださいよ」

そんなやりとりをしていた頃だった。実は桂の側にいた、ちよつと空気になりかけていたエリザベスが

ボードを取り出す。

エ「桂さん、そろそろ帰りましょう。真選組がここにきたらたいへんです」

ボードにはそう書いてあった。仕方がないと思い、今日はここまでとするかと言い、桂とエリザベスは

万事屋から去って行った。最後にこんな言葉を残して……

桂「その昔の俺と銀時と高杉。何があったかは詳しくはわからないが、来てしまった原因をこちらで もできるだけ調べてみる。

だから、気をつけるのだぞ」

銀「…はいはい、さっさとツラは帰った帰った。つか、もうウチにくるな」

桂が帰ったあと、かなり遅い朝食をとっていた。今日はすこしだがおかずがある日。ただ、いつもより会話は少なかったが…

すると

妙「銀さん、いるなら開けてちょうだい。私よ」

新八の姉、志村妙がやってきた。

神「おお！姉御、ちよつとまつアルよー」

神樂が玄関に向かい戸を開ける。そこには何かを持った妙がいた。

その何かとはいったい：

妙「あら？神樂ちゃんこんにちは。卵焼き沢山焼いちゃってあまっちゃったから分けにきたのよ。

はい、これ」

何かの正体は卵焼きだった。

特に何もない（後書き）

あんまり長くないですが、多分次回はお妙の作った卵焼きについての話になると思います。遅くなるかもしれませんが、よかったら次回もお願いします

卵焼きのようなもの（前書き）

つまらない文を読んでくれている人がいるとわかるだけで
嬉しく思います。

全然原作に向かう気配が今のところありませんが、卵焼きの後から
入れる：
のかな…？

それから、お気に入り登録ありがとうございます

卵焼きのようなもの

銀「おいおい……どうすんだよ、これ……」

今、彼らの前には妙の持ってきた卵焼きになるはずのかわいそうなモノたちがあつた。

しかも量は意外にも多く……

神「銀ちゃん、私は食べないネ。もうお腹いっぱいよ。だからみんなで分けてたべるのが

「いいネ」

しかも、受け取ってきた本人が食べない宣言をしている。まあ、妙は神楽に卵焼き？を渡したあと帰ったので居ないが…。

どうしたものか、いっそ過去から来た三人にでも騙して食わそうか、とか銀時は考えていたが、

それでお亡くなりになりましたとなったら大変だ…。

はああ……

新「えつと…これは姉上がもってきた卵…焼き…なんです、食べます？」

新八以外の全員「ええーっ！っ！食えます？つてええええええ
ええええええええ！！！」

と叫びそうになった。新八は勧めたが、だからといって食べて欲しいわけでもなく……

でも食べないとあとが恐ろしいというか……

といろいろ考えていると、やっぱりいけないだろうが簡単なことを
思いつく。

新「食ベ物を粗末にしたくはないですが…食ベれませんし…」

「捨てちゃいます…?」

これについて銀時と過去3人は賛成するが

神「そんなのだめアル!——ツほあちやあああああ」

神楽一人が反対し、そのまま（攘）銀時の口に向かって卵焼き？を投げつける。

それは見事にはいり：

（攘）銀「うぐッ」

顔が青ざめたかとおもうとそおまま気を失ってしまった。

（攘）高「お、おい！銀時、大丈夫か」

（攘）桂「：（これは卵焼きなのか：？）」

銀「ええええ！神楽ちゃん、何しちゃってるの！過去の俺、氣いうしなっちゃたよ

どうすんのコレ！」

神楽以外が（攘）銀時を心配し、次に神楽に気に向けた時だった。

神「うおおおお！くらえ！！姉御の卵焼きい♪」

もう神楽は遊んでいた。そして、卵焼きを全員の口めがけて投げつけそれもまた見事にはいり、全員その場で気を失った。

神「ふんッ。銀ちゃん以外には本当はやるつもりはなかったアルが、まあいいか。最初はどっちが

銀ちゃんか迷って間違ったネ」

その日の夕方、全員は目を覚まし、何があったか思い出そうとしたが思い出せなかったという：

卵焼きのようなもの（後書き）

めちやくちやなまま終わります。

次回から入れるかな：

今回もありがとうございました

そういえば、ツラの誕生日だったこと忘れてましたorz

ウイスキーのボンボンって? その1 (前書き)

やっ
と…

ウィスキーのボンボンって？その1

過去からきた3人がこの時代に来て二日、運がいいのかそれともあまり外に出ていないからかはわからないが、真選組にまだ彼らが来ていることは知られていなかった。

このまま本当に何もなく、そしてすんなり戻ればいいのだが：

江戸では今ある映画が流行っていた。「えいりあんVSやくざ」というものだ。

？「うるせエエエ！デケー声出すんじゃねー！！」

とある所にて何かを持ち上げて大声を出す男がいた。

なんかエイリアン退治がなんとかと言っている。

男の名は

星海坊主……。

万事屋に電話がかかってきた。

（攘）高「おい、電話かかってるぞ。誰かでねえのか？」
するとそれに応えているわけではないが、

神「はいはい、万事屋ですけど何アルか？」

神樂が受話器を取る。

？「もしもし、拙者 拙者…」

？と、神樂はハテナマークを浮かべる。誰かきくと

？「拙者だって！今ね、大変なことになってね…」

よくわからないが、神樂は銀時だと思って話を進めようとした。

（攘）銀「ん？神樂って誰と話してるの？」

自分は拙者など使わないので、未来の自分も何かなければ一人称を変えすることもないだろうと思いい神樂に問う。

神「たぶん銀ちゃん」

（攘）銀「へ：あっそ：、ってちょっと待て！！」

受話器の向こう側の人が妊婦をはね、口座に金を振り込めと言われ、神樂は出ていってしまう。

するとちようどこちらの銀時がトイレから戻ってきていた。

銀「あれ？今誰か出てかなかった？」

実はずっとテレビを見ていた新八と（攘）桂が

新「なんか電話であわててできませんでしたけど」

（攘）桂「ああ、うっすらと聞こえたんだが、妊婦をお前がはねたとかで…」

と言って新八は銀時を、（攘）桂は（攘）銀時をみる。

銀「いや、俺さっきまでトイレにいたから」

（攘）銀「俺だってさっき神樂と話してたろ…」

（攘）高「：？拙者拙者詐欺…」

テレビでやっているものを（攘）高杉が読み上げる。その瞬間、え？と、全員が固まる。そして、

銀「もしかして、神樂引っかかっちゃったとか…？」

全員神樂を探しに外へ出るのであった。

ウイスキーのボンボンって? その1 (後書き)

面白くかけないですorz

ウィスキー（以下略） その2（前書き）

お気に入り登録してくれた方ありがとうございます

こんな駄文を読んでもらえるだなんて…

更新は不定期で遅いですが、これからよかったらお願いします

あと最近、暑いですね…

熱中症などに気を付けてお過ごしください。

ウィスキー（以下略） その2

沖「星海坊主？なんでイ そりゃ？」

星海坊主は真選組にきていた。

星海坊主について知らない沖田は説明を受ける。

近「江戸にえいりあんが？わざわざご忠告ありがとうございます」
ついでに江戸にえいりあんがきていることを聞くことになった。
しかも寄生型が・・・

この頃、神楽は銀行にて米を振りまいていた。

神「すいまっせーん。早くふりこめないと銀ちゃんぐがブタ箱にイ
イ！」

振り込めを勘違いし、米の入った袋を銀行内で振り回していた。

まわりはとても迷惑そうな顔をしている。そんな中ひとりの男性が
従業員の前にたっていた。

だが、様子がおかしく…

映画館の前にて…

土「はあ？星海坊主が？んだってそんな大物が…グス」

真選組局長の近藤は副長である土方に車にある無線で連絡をしていた。

近「アレ？なにかあったか？」

土方が泣いているように感じた近藤は疑問に思った。

土「なんでもねえよ。で、なにかあったか？近藤さん」

近「ああ、それが…」

それは、江戸に第一級危険生物の寄生型えいりあんが入り込んだというものだった。

それを聞くなり土方は車を飛ばし、

土「えいりあんがなんぼのもんじゃあああああ」

そう声を張り上げた…

一方真選組では近藤がアナウンスで隊士たちにえいりあんに寄生された人の特徴をつたえていた。

隊士や土方が探している中、一番隊の隊長である沖田は部屋でテレビを見ていた。

それに写っていたのは…

沖「パンダダ」

近藤のいった特徴がある人であった。

ウイスキー（以下略） その2（後書き）

今回もいつも通り短いですね…

次回はきちんとみんなを出せるよう頑張りたいです
しかもところどころに誤字が…o r z

ウイスキー（略）その3（前書き）

改めて、感想ありがとうございます。

なんかとても元気が出ました

実は学級副委員長をやっているのですが、なんかこれからもやって行けそうな気がします

そして、こんなつまらない意味のわからない文を毎回読んでくれている

みなさまにも、本当にありがとうございます

ウィスキー（略）その3

奉行の誰か「でてきなさい！君は完全に包囲されている！！」

銀時たちが神楽を追い、銀行についた頃には何か事がおきていた。しかも野次馬までいる。

（攘）銀「な、なあ…まさか何かしちやった、とか…」

銀「遅かったか…」

……。誰も言う言葉が見つからなかった。それでも新八は新「これ…、まさか神楽ちゃんか？」

と神楽が起こしたのかときく。それに対し銀時が詐欺に騙され、金を振り込むにも

振り込む金がないからこんなことしてんだろ…と返す。

とにかく神楽を止めようと銀行内に入ろうとする…

新「神楽ちゃん！」

（攘）銀「神楽ッ！」

入ろうとしたまではよかった
よかったのだが…

（攘）高「あ…っと…」

（攘）桂「…えっと………」

全「すみません、間違えました」

何かいた。居てはならない何かがいた。

それを見た野次馬達は化け物と叫びながら銀行から逃げていく。

銀「…いやゝみんなよかったね…神楽ちゃん犯人じゃないみたいだ」

神楽が犯人じゃないのはわかった。だが…

（攘）高「…襲われて…なかったか？あいつ…」

神楽が襲われているように見えたのだ。何かを口から出すおじさんに…

銀「ア、アレだろ… 親父だきつと… あの電話は親父からだったんだよ」

（攘）銀「で、でもそれならあんたが妊婦引いたとか関係なくね…？」

……。さっきのはきつと親子の抱擁だったんだと新八が言い、皆きつとそうだ…

と思い、銀行を後にしようとする…

新& a m p; 銀「!!?」

何かに足をつかまれる。

神「銀ちゃん、ひどいヨー どうして助けてくれないネ」
えいりあん？まみれの神楽であった。

ウイスキー（略）その3（後書き）

更新遅くて申し訳ありません。

これから塾などにも行くことになったり高校見学や勉強やらテストやら検定試験やらでいろいろありますが、更新は遅くなってもちゃんと行いたいと思います。

誤字の多いめちゃくちゃな文ですが、よかったらこれからもお願いします

ウィスキー（略）4（前書き）

浴衣って、一人で着るの大変じゃないですか…？

お祭り行くとき毎年着ていくのですが、なんか大変です…

ま…、こんなのはどうでもいいですが…

では、駄文が始まります

あ…

攘夷の人たちの服装を書いてなかったorz

一応ですが、新八の家から着れそうな袴などを借りて着ています。

そのままだと目立つと思いましたが。基本は、刀は外では持ち歩きませんが、というより下げていませんが、万事屋に居る時のみ各自で持っています。外では気分によって木刀を借りてさしています。

今は急に万事屋をでたので銀時以外は下げてません。

では、失礼しました；

ウィスキー（略） 4

銀& a m p;新「ぎゃあああああ！！！」

神楽が足をつかんでいる。もう、えいりあんに飲まれそうな状態で神「私銀ちゃんのためにたくさん振り米したネ。神父はどうなったアルか？」

（攘）銀「あれ！？妊婦じゃなくて神父だったの！！？ってか誰だあれっ！」

神楽は妊婦を神父だと間違えていた。そんなやりとりをしている間にも

知らないおじさんの口からは気持ちの悪いものが出ていた。

（攘）桂「なんなんだアレは？口からおかしなのがまだでろでろ出ているではないか」

でろでろ出ていた。別にそんなことよりもこの状況をどうするかが最初だ。

（攘）高「ッおい！！！」

新「うわ！」

銀「うお！！！」

ずるずるとおじさん、口からでろでろ出す男の方へと引きずられる。するとなんということだろう。

何か顔ができ、神楽と共に銀時と新八まで飲み込もうとしていた。

（攘）銀「やべーぞ、おい……。何かねえのかよっ」

神「ぺっ、銀ちゃんと新八は道連れじゃー！」

（攘）高桂銀「なに言ってるんだ、お前！！！」

しかも神楽は二人を道連れにしようとしていた。

特になんともない3人は辺りを見渡し使えそうなものはないかと探すかなかなか見つからない。

そんな時だった。

星「お、いたいた」
誰かが銀行内へ入ってきた。

ウィスキー（略） 4（後書き）

実は履きなれていないサンダルで遊んできてしまい

とても足が痛いのでちよつと短いですが

小説は今日はここまででいいでしょうか…

しかもあの暑い中、服装も帽子がかぶれるようなものでもなかった
ので

とても疲れてます…

やばいですね…

明日学校なのに大丈夫なのでしょう…

これを書いている時もミスタイプばかりして直すのが大変でした…

あ…ほかの章も直さなければ…

最後に、ありがとうございました

なんか、もう…ね… ウィスキーその5 a n d 子作りは…（前書き）

あー…

なんでだろ…

なんで長ったらしい英文を1ヶ月で覚えなければいけないのだろう…

いままでの経験からすると、私には少なくとも3ヶ月は必要なん

です…

はあ…

なんか、もう…ね… ウィスキーその5 and 子作りは…

銀行に入ってきた男は傘を持ち、えいりあんの方へと突っ込んでいった。

えいりあんは銀行の壁に飛ばされる。

崩れた壁のもとには先程まで暴れていたえいりあんとそれに突き刺さる壁、そしてえいりあんに寄生されていたであろう男がいた。ぴくりとも動かなかった。

銀「あの傘…」

傘をよく見ると神楽の持っているものによく似ていた。もしかして…星「さがしたぞ、神楽」

男は神楽を知っているようだ。その声に、神楽が振り向く。

神「え…、パピー？」

・
・
・
。

神楽以外「…、ぱ、パピーイイ!？」

一方外では真選組が集まっていた。

沖「えいりあん、お前は完全に包囲されている。ムダな抵抗はやめて

おとなしく投降しなさい」

沖田が銀行内にむかって、えいりあんに投降をうながす。

沖「故郷のお袋さんが、そんなえいりあんにするために産んだんじゃないって泣いてるぞ！」

退「どんなえいりあんだよ」

側にいた監察の山崎退がさりげなくつつこむ。

なんかんやお袋さんが泣いているとかで話を進めていると

沖「お袋さん、なんか言ってやってください」

退「え？いるの？お袋さんいるの？」

どうやらお袋さんが現場に来ているらしい。

パトカーの方から扉が開き、お袋さんとおもわれる人？が降りてくる。

近「お母さん、もう知らないから。もう息子は居ないものと思ってたから：」

局長の近藤だった。

だが、言い終わる前に後から来たパトカーにひかれてしまう。

隊士A「局長おおお！！」

パトカーが止まり、誰が来たかと思えば：

土「えいりあんがなんぼのもんじゃーい！！」

誰が思うだろう…。副長の土方であった……

なんか、もう…ね… ウィスキーその5 and 子作りは…（後書き）

うゝん…

次あたりで上手く考えないと攘夷の人たちが捕まってしまう（一

—；）

どうしようか…

よりも、更新を頑張らければ！

今回も、ありがとうございました。

本当に熱中症には気を付けてお過ごしください。

子作りは…2（前書き）

そろそろ塾へ行くことになりそうです
が、更新はしつかりと行いたいと思います
不定期なのはそのままですが；

※この話では過去の人が真選組の人とはまだちゃんと会うことはあり
りません

子作りは…2

隊士「局長おおお！しっかりしてください！！」

真選組隊士の誰かが後から来た副長のパトカーによって弾かれた近藤を心配する。

心配していた中だった。銀行から誰かが出ようとしていた。

山「！」

最初に気づいたのは山崎だ。それに続き周りも警戒する。

沖「かまえ！」

沖田の指示で皆バズーカをかまえる。

そして…

『……』

でてきたのはえいりあんでなく

星「いいからこいって…。あ、あれだ。マロンパフェ食わしてやるから、な？」

ハゲたおっさんと：

神「ちょ、離してヨ。 離れて歩いてヨ」

星「なんだ、お父さんと歩くのが恥ずかしいのか！？どこが恥ずかしいんだ、言ってみろ！」

神「もう取り返しがつかないところネ」

：神樂であつた。

おっさんが取り返しがつかないところはないといい、一度死んだ毛根は戻らないという神樂を連れどこかへ行こうとしていた。

その間真選組の人たちは意外なものの出現により、何も言えないでいた。

神樂とおっさんが少し遠くへ行ったところだ。銀行から人が出てこようとしていた。

山「……。あっ！まだ誰か…」

銀「すいません、僕もマロンパフェ…いや、フルーツパフェにしようかな？」

（攘）銀「あ、俺もいいですか？」

先に出てきたのは銀髪の死んだ魚の目をした男と彼に似ているがまだ目のあまり死んでない青年だった。

子作りは…2（後書き）

うう…

朝からこんなに暑いと辛いですね…

ポカリなどを飲むときは3分の1くらい薄めて飲むことを
おすすめします。…あれ？3分の1でいいのかな……

子作りは…3? (前書き)

おおぅ…

第二回の実力テストの範囲表が配られたのですが、さあて…

次で370くらい取れなかったら志望校きついな…

はぁ…数学どうしようかな…

数学ダメなんですよね…

平均点突っ走ってますものw

子作りは…3？

ちよつと話は戻り、神楽たちが出て行つた時だ。

新「…ん？あ、あれ真選組の人達じゃ!？」

神楽たちが出ていったほうを見ていた新八は外に真選組がいることをしった。

このまま出ていったら（攘）桂やたぶん（攘）高杉も危ないと思い銀時に伝える。

新「銀さん、外に真選組がいますよ!どうしますか？」

銀「あ?そんなの…。あ、あつたあつた」

すると銀時は銀行内で何かを探し始める。そしてみつけたのは…

銀「前にヅラが松だなんだやってたよな?これでよくね?」
木の枝数本だった。

新「いや、よくないでしょ。バレますよそれじゃ」

銀「てなわけで（攘）ヅラに（攘）高杉、これで顔隠しながら木になりきって外に出るぞ」

新「おいしい!話きけよ!!」

どうやら木のふりをして外へ出るようだ。（攘）高杉はすこし嫌そうな顔をしたが、しかたがないかと思ひ木になりきってみる。（攘）桂の方は最初はなぜかと疑問におもっていたが、今はもういつ外にでもよいようにほぼ木になりきっているつもりでいた。

銀「てなわけで銀時君、俺らは先に出るとするか…って自分の名前言うのなんか

恥ずかしいな…」

（攘）銀「…俺このまま出ていいのか？」

新「え、ちょ、ほんとにこれで行くんですか!」

前列に銀時と（攘）銀時が並び、後列に新八と木になりきっているとおもっている（攘）桂と頑張ってる（攘）高杉が並ぶ。

そして、外へと一歩踏み出し…

銀「銀「すいません、僕もマロンパフェ…いや、フルーツパフェにしようかな？」

（攘）銀「あ、俺もいいですか？」

とさりげなく、何事もなかったかのように後ろにメガネと木のふりをして人をつれ

神楽達が向かった方へ歩き出す。

真選組隊士達「…え、なに…？木？あれ、木？」

そうしてなんとか真選組をごまかし多分無事に5人は神楽たちと合流することができた。

今はデパートのレストランだ。狭いが7人で頑張って窓側のソファ1のところに座る。

座るつもりだったがどうしても一人入らないため傍にあった椅子を使うこととなった。

新「星海坊主ううう！？えっ、神楽ちゃんのお父さんが！？」

何か話をしていると、新八が神楽の父について驚く。

が、過去からきた三人と銀時は知らないようで…

銀「星海坊主…？なにそれ、妖怪？ってか坊主じゃねーぞ、うすらってるぞ頭」

星「オイ、うすらってるってなんだ。人の頭をさすらってるみたい

なんて言い方するな」

うすらってるって…、（攘）高杉は思うが口には出さない。彼も少しはあれは坊主じゃないだろうと思っただからだ。

（攘）銀「でさ、星海坊主ってなんなの？」

子作りは…3? (後書き)

暑い!

朝から暑い!

今日も駄文にお付き合いいただきありがとうございます。
更新不定期の話はちよろちよろとしか進まない駄目な
人が書く小説ですが、楽しんでいただけたら幸いです

よかったらこれからもよろしくおねがいします
では…

子作りは…4（前書き）

レストランでの席の座り方ですが、

単行本7巻を持ってる人、または見たことがある人はわかりやすいと思いますがない人のために頑張っていないけどなにか作ってみました。
わかりづらかったらすみません
（ソファのところに座ってます）

— 通路 —

（攘）高

（攘）桂 — テ — （攘）銀

海 — — 銀

神 — ブ — 新

— ル —

窓

というような感じです
わからなかったらすみません；

子作りは…4

新「星海坊主とは最強のえいりあんバスターっスよ。化け物を狩るため銀河中を駆け巡ってる

さすらいの掃除屋」

と、いわれなんとなくわかった過去三人と銀時。

銀「あーハイハイ、きいたことあるそれ。

うすらいの掃除屋」

違う…なんか違う…と、突っ込みたいが突っ込めない（攘）高杉。

その言葉を聞いた星海坊主は

星「オイ、うすらいの掃除屋ってなんだ。ただの駄目なおっさんじゃねーか」

なんかカチンときたと…、どうやら怒ってしまったようだ。

ものすんごく気にしてるのか、もう指まで鳴らしている。

神「落ち着くネ、ウスラー」

神楽が星海坊主を止めようとしているのかいないのかわからないが、ウスラーと言われ

ハスラーみたいだと星海坊主は気がつく。いいのかわからないが少し気に入ったようだ。

（攘）桂「ウスラーでいいのか…？えっと、ウスラー殿、俺は桂小太郎と 銀「って勝手に

あいさつしてんじゃねえぞ！」

（攘）桂のあいさつを頭を殴りながら銀時が止める。が、もうすでに名を名乗っていた。

しかたなくそれぞれ自己紹介をすることになった。名前だけだが。神「じゃ、紹介するネ。あの駄メガネが新八で 新「駄メガネじゃないから」そのとなりの

ダメな白いモジャモジャが銀ちゃんアル 銀「いや、だからダメってなに」 でのとなりの

ちよつと若い銀ちゃんが銀ちゃんネ　（攘）銀「結局銀ちゃんじゃん」　で一人むなしく

飛び出てるのが……。…ウスラーの隣が　（攘）高「おい、なんで飛ばした」　ヅラアル。

（攘）桂「ヅラじゃない桂だ」　あ！思い出した、椅子の奴は高杉とかいってたアル」

なんとか神楽の適当な紹介が終わった。てか、長いな…
神「こいつらが私がここで面倒みてやってる連中ネ」

（攘）高「お前がみてもらってんだろ…」
とちいさく（攘）高杉はいう。

それらをきき終わった星海坊主は、
星「フン、何かよからぬことでも考えてたんじゃねーの？

夜兎の力を悪用しようと企んでる輩もいるしな」

夜兎…？その言葉を聴き、過去組はやっぱりそうだったかと頷く。
最初にあったときから思ってたはいたが、本当だったとは…。

本人や周りがいわないから訊かなかったが。
だが、そんなことは関係ない。神楽は神楽だ。

自分たちにとって天人は敵だが、ここにきて神楽と話しをし、今夜兎だとわかって

嫌いになるようなことはない。が、それでも全てを許せるかどうか
ときかれたら

それはないだろう。

それに神楽の父親が言う悪用しようとかそんな考えはない。

（攘）銀「…そんなことしねえよ。それに」

銀「それに、悪用っててめーの頭で大根でもすりおろすことを指すのか？」

（攘）銀高桂　新「……」

子作りは…4（後書き）

つまらない文を今回も読んでいただき、ありがとうございました
では、また次回で

子作りは…5（前書き）

塾へ行くことが完全に決まりました。

が、空いている時間をみつけて更新したいと思いますので
こんなつまらない文でよかったです。これからも
よろしくお願いします。

子作りは…5

(攘) 銀「…別にあなたの頭で大根を、とか言いたかったわけじゃ……」

銀「だいたい今まで娘ほったらかしてた親父がとやかく言えた義理かよ」

星「なんだア　こちら必死に探し回ってたんだよ。」

ちよつと目を離れたすきにいなかったんだよ」

(攘) 銀時の話は無視された。

星「難しーんだよ。この年頃の娘はガラス細工のように繊細なんだよ」

銀「何いってんだ。ガラス細工のような危ない頭しやがって」

だんだん話が別の方向にそれていく。なぜだ…。

星「てめえええええ！今のうちただぞ強気でいられるのは！！」

三十過ぎたら急にくるんだよ！！

いつのまにか毛根の女神が実家に帰ってたんだよ！！」

銀「いだだだだだだだ」

(攘) 高「うおっ！」

頭の話になり星海坊主が銀時の胸ぐらを掴むと、(攘) 高杉が座っていたにもかかわらず

通路側へと引っ張りだす。

新「二人ともやめてください！」

と、新八が止めようとするがきかれることはなく…

星「とにかく、てめーらのようなやつにうちの娘は任せられねえ。

神楽ちゃんは連れてかえるからな！」

神「なーーーーに勝手に決めてんだアア！！」

星「ぐはっ！！」

話の流れにのってかは知らないが、そのまま神楽を連れ帰ろうとすると神楽に飛び蹴りを食らわせられる。その蹴りを受けた星海坊主

は銀時を巻き込み飛ばされ、銀時は別のテーブルにぶつかる。
星「神楽ちゃん何すんの！ドメスティックバイオレンス！？」

神「今まで家庭ほったらかしてたパピーに今更干渉されたくないネ。
私は勝手に地球にきた、

帰るのも私の勝手にするネ」

私は私、パピーはパピー。

神楽はどうしても帰りたくないようだった。

それでもあきらめない星海坊主は説得を続けようとする。

星「神楽ちゃん、家族は鳥巢のようなもんだ。鳥はいつまでも飛び
続けられる

わけじゃねえ。帰る巢がなければいつか地に落ちちまうもんさ」

それに神楽はこう返す。

神「パピーは渡り鳥」

帰る巢なんて必要ないアル――∴。

そのやりとりを、神楽と星海坊主いがいが黙ってきいていた。

神「私もそう、巢なんて必要ないアル」

神楽の思いを変えることは難しいようだった。

子作りは…5 (後書き)

短いです…。

すみません…

子作りは…6?アレ?6でいいんだよね? (前書き)

夏休みに入っても勉強だらけです・・・

子作りは…6?アレ?6でいいんだよね?

・
・
・
。

星「なんでこの止まり木にこだわる？」

ここでしか得られねえモンでもあるってのか？」

(攘) 桂「ハゲ殿、少々言い過ぎではないのか」

星海坊主の話の邪魔をした(攘) 桂。

だが、他の人は親子同士の会話に口を出せないでいた。
てかハゲって…。

星「オイ、今ハゲつつたな…ハゲって 神「(攘) ヅラ…いいアル」

(攘) 桂「…」

話がそれってしまったが、辺りに緊迫した空気が流れ始める。

神「あそこに帰って何が得られるネ。私は私の好きな木に泊まって
好きに飛ぶネ」

星「…ガキがナマ言ってるじゃねーぞ」

神「ハゲがいつまでもガキと思ってんじゃないネ」

さらに状況はまずい方向へ…。

そして、神楽達の会話をきいていた銀時たちはこれはヤバイと感じ
始める。

(攘) 銀「な、なあ…やばくね？」

(攘) 高「…ああ」

新「何このカンジ」

もうこれはヤバイ！

そう思って銀時が止めようと話しかけた時だ。

神「ほあちゃあああ!!」

遅かった。神楽と星海坊主は窓を突き破り、そして親子喧嘩にみえないが親子喧嘩を始める。

新「神楽ちゃん!」

神「あちよおおおおお!!」

土「いいか、丁重に外に運び出してくれ」

真選組はあのえいりあん騒ぎのあった銀行にいた。

沖「土方さん、こんなきみ悪リィ死骸

何につかうんですかィ?」

どうやらえいりあんの死骸を運び出しているところのようだ。

肘「入国管理国の連中がもってこいってよ」

へえ、そう沖田が返すとちよつと気になっていることがあったので

沖田はきいてみることにした。

沖「ところで土方さん、あんたいつから肘方になったんですかィ?」

近「…ん? あ、ホントだトシ…」

肘「…別に今はいいだろうが今は。後で元にもどつから」

土方の土のところが肘とわざと表記されていた。

土「で、どっかのお偉いさんが欲しがっているんだとよ」

沖「あ、戻った」

沖田は肘が土に戻ったのを少し残念そうに

しながら土方の話を聞いていた。
聴いていたではなく聞いていた。

土「まったく、趣味の悪い野郎もいたもんだ」
聞いていたとはいえ、ちゃんと話の内容は理解している。多分。
沖「しかし星海坊主ってのはいつもこんな化け物とやりあってんで
すかィ？」

どっちが化け物だかわかりやしねーや」
えいりあんの死骸を見ながら沖田は言った。
しかも星海坊主は神楽の親だという。
すると近藤が急に語り始めた。

近「男には二種類の血が流れてる」
一つは家族や仲間 自分の巣を守り、安寧をもとめる防人の血
もう一つは巣からでて 獲物を求めてさすらう狩人の血
近「あの男の目は、狩人よりも獣に近い。おとなしく

巣におさまってるタマではあるまいよ」
もしかしたらあの娘、今までさみしい思いをして
生き延びてきたのかもしれないな…

ドオンという音が建物から響くと人影が現れる。
その人とは――…

星「だいたい嫁入り前の娘が男と同棲なんて
許されると思ってるのかァァ！そういうところからできちゃっ
た結婚とか

うまれてくるんだよ!!」

神「私そんなふしだらな女じゃないネ!!」

「だいたいマミー　できちゃった結婚だったっていったネ!!」

星「あのアマああ　子供に何んてことしゃべってんだアア!!」

神「だからパピーにとにかくいわれる筋合いはないネ!!」

親子喧嘩中の神楽と星海坊主であった。

しかも、二人ともしゃべっていることとやっていることがあまり合っていない…

子作りは…7

只今親子喧嘩中――

一方、ファミレスを出た彼らはこれからどうするかを話しあっていた。

神楽達親子を探すか万事屋へもどるかについてだ。

（攘）桂「俺と（攘）高杉は戻るが、お前はどうする？」

桂はここについての話をした時に自分や（攘）高杉はあまり出歩かないほうがいいと言われたのを思い出し、万事屋へ戻るという（攘）銀時の方を見る。自分等とはともかく、彼なら出歩いても大丈夫だと思ったからだ。

だが（攘）銀時は断り、話し合いの末神楽を探すのは銀時のみとなつた。

新「それじゃ、戻りながら僕らも探すつもりですけど、お願いしますね銀さん」

銀「おう」

そう言って彼等は別れた。

新「神楽ちゃん、帰ったりしないよね？」

（攘）高「……さあな。帰るか帰らないかはアイツの勝手だ」

帰り道、新八が思っていたことを口にした。それに最初に答えたのは（攘）高杉だった。

(攘) 高「親子の話だ。俺らが決めることじゃねえ…」

(攘) 高杉自身天人は嫌いだが、神楽にかんしてはそんなに嫌いだとかは思わなかった。そのため、解りづらいが寂しそうな顔をしている。

それに気づいてはいるが

(攘) 銀「じゃあさ、(攘) 高杉はアイツに帰って欲しいのか」と問う。

(攘) 桂「……(攘) 銀時、神楽殿が帰るかどうかは俺らがどうこう言える事ではない。それに——」誰も神楽に帰って欲しいとは思っていないかった。

そのまま会話はなく、気まずい空気のまま彼等は万事屋に向かうのであった。

万事屋に着き、(攘) 銀時は帰る時に(攘) 桂に言われたことを思い出していた。

(攘) 桂「——天人は、敵だ」

彼も別に神楽の事は嫌いではないのだが、彼だけでなくどこかです思っている自分がいた。

子作りは…7 (後書き)

不定期更新なのにいつもありがとうございます

子作りは…8…
(前書き)

感想ありがとうございます！
勉強も頑張りますね；

子作りは…8…

新八達が万事屋へ向かった頃、銀時は一人で神楽達親子を探していた。

銀「…ったく、アイツ等

少しは周りを考えろよ！」

とりあえず

いそうなところ、アイツ等が喧嘩できるような広い場所から探して行った。

だが、なかなか見つからない。

探し疲れ、今度は駅の方へ歩いて向かって行くと誰か「ねえ聞いた？ 駅で人があばれてるってさ…」

そんな話し声が聞こえた。

まさか駅でやらかしてるんじゃないかと思い

少し歩むスピードを速めた。

銀時が駅に着いた頃、そこにいた人々が駅から離れて行くところだった。

銀「なあにやってんだか…」

そうあきれながらも

神楽達を探す。

すると、目にはいったのは神楽が星海坊主に傘で飛ばされ、少し離れていた親子の方に

ぶつかりかけていたところだ。

——つたく、しょうがねえな…

そう小さく眩き、神楽と親子の間に入る。

そして、ぶつかる衝撃を受けると同時に神楽を受け止める。

神「銀ちゃん!!」

神楽は銀時が自分を受け止め、あの親子にぶつかるのを防いだのかと理解した。

子供「お母ーさん!」

銀「はあ…、何やってんだてめーら」

神「銀ちゃん、私…」

神楽はただ銀時を見ていた。すると、

星「なんのマネだ?」

親子喧嘩にクビつつこむなんざ

ヤボだぞ——…

星海坊主が言った。

銀「派手に暴れやがって…

とんだ親子だ。蛙の子はやっぱり蛙だな」

そして…

銀「…：帰れよ」

神楽は今銀時に言われた事が信じられず、聞き返す。

銀「お前にゃ やっぱ地球は狭いんじゃないの。」

いい機会だ。親父と一緒に行けよ」

これで

さよならと

しよや——

そういった銀時は神楽に背を向け、去ろうとする。神楽は銀時の言った事が本当かわからないでいた。ただ、この言葉を信じたくなかった。

神「…銀ちゃん？なんでそんな事いうネ」

神楽が話しかけても

銀時は歩みを止めない。

神楽はただ一人、なんで？なんで？と繰り返していた。

子作りは…8…（後書き）

今回もありがとうございました

トイレに入るときは…1（前書き）

前回は携帯での初めての投稿で大変読みづらかったかと思えます。

すみませんでした

トイレに入るときは…1

一人ぼつんと、階段に座る女の子。

「おじょーさん、どうしたんだい

こんなところで」

そんな彼女の元に天人達が現れる。天人達は彼女に向かって話しかけた。

「おじさん達と一緒にこない？」

彼等は彼女を連れ去ろうとしていた。

女の子は――…

彼等が黙って静かになった頃、男が現れた。

男は話しかけた。

星「おじょーさん

どうしたんだい、こんなところで。こんな日に
傘もささないで」

女の子は答えた。

神「今日は雨だからイイネ」

男は驚くふりをする。

星「そりゃおかしい

傘とは本来雨をしのぐためにさすもんだ」

女の子は応えた。

神「雨の日まで傘さしてたら

いつまでたっても空をおがめないネ」

雨空でもいいから
私も空をおみたいネ

男は女の子に近づいていった。
星「フン

風邪ひくぞ」

神「パピー！！」

女の子は父親に抱きついた。

場を移動し、建物内に入ると
神「パピー、次はいつ帰ってくるネ？」
幼い神楽は父親に問う。

星「今帰ってきたところなのに

もうそんな話か」

神楽の問いにそう答えると、神楽は悲しそうな、寂しそうな顔で神「…もういけないでヨ、パピー」

私もうマミーの苦しむ姿、見たくないヨ

兄ちゃんも帰ってこないし、パピーも帰ってこない
…私寂しいね

そう続ける。

星海坊主そんな神楽を見てなんとも言った言葉をかけた。

星「母ちゃんの病気もきつともうスグよくなる

兄ちゃんももうスグ帰ってくる

それまで俺が金を稼いでお前は母ちゃんを護る」

そう約束しただろ？

星海坊主は幼い神楽にそんなことを本当に何度言ったのだろう…

何度あの汚いドブ川のような場所にアイツ、神楽を残していったのだろう…

それでも神楽はダメ親父こと星海坊主の帰りを何度笑ってむかえてくれたのだろう…

母親が死ぬまでその繰り返し、星海坊主は神楽に一度も暖かい巢など作ってやる事ができなかった。

星（それでお前はこんな遠いところまで巢なんか探しにきちまったんだな…）

トイレに入るときは…1（後書き）

宿題に夏休み中3回はプールに行け
とかあるんですが、そんなにいきません！！

トイレに入るときは…2 (前書き)

遅れました；

そしてめっちゃくちゃですorz

なんか途中、新八新八と新八という単語が多いところがあります

トイレに入るときは…2

銀「お前にゃ地球は狭いんじゃないの

これでさよならとしよーや」

神楽は今、星海坊主と共にターミナルにいた。
理由は父親と帰るためだ。

星「薄情なもんだな。しばらく一緒にいたってのに

見送りに来やがらねエ

結局アレか

なついていたのはお前だけで連中はそうでもなかったってことか」
神楽はずっと銀時に言われた言葉を頭の中で繰り返し返していた。

まだ、彼の言っていたことが嘘ではないのかとさえ思っている。

いや・・・思いたかった。

星海坊主の言葉を見直し、うつむいていると星海坊主が神楽に腕を
回してきた。

神「くさい」

……。

新「あゝあゝあゝあゝあゝあゝ!?!」
解雇才!?!」

銀時が一人で帰ってきた。

その時はまだ、神楽は後で帰ってくるものだと思っていたが、次の日になり新八がやってきて、

神楽はどうしたのかと新八が銀時の元へと訊きにいつていると新八の声が響く。

銀桂高「は？」

最初はわからなかった三人だが、彼らの元に近づき話を聴いているとどうやら神楽は解雇されたらしい。

（攘）銀「解雇！？なんであいつが解雇されなきゃいけないかったんだよ！」

新八だけでなく、三人も衝撃を受けていた。特に（攘）銀時は。

ここでは描写する余裕が馬鹿な作者になかったため書いていないが、（攘）銀時はここにきて（攘）高杉や（攘）桂意外に、初めてと言ってもいいくらい

ほんのわずかで話しやすいくらいに、新八や神楽とも仲がよくなつ

ていた。

しかも神楽は天人である。確信にかわったのはつい最近の中の最近だが…。

ああは言ったものの、なんとなく、ここの自分が神楽を解雇したのかわかる気はする。それでもなぜか嫌だった。

銀「うるっせーな

深ヅメしちゃったよ

てめっ、どーしてくれんだ」

まるで新八と（攘）銀時の話が聞こえていないかともいうような反応をする。

（攘）桂「では、神楽殿は父親と共に帰ったということか？」

まさか…と思いいながらも、（攘）桂が先に質問した。

銀「じゃねーの？」

1日たってるし、よかったろオ？金貯めて実家帰るとか

言ってたし」

どういった経緯で神楽が万事屋に

なったか詳しく知らない三人は、それだけの話だったらしいのではなかったが

彼、銀時の話し方に少し違和感を感じていた。

銀「それにお前なア、ガキとはいえ

女の子が野郎の家に上がりこんでるっていうのはイカンよ
やっぱり。

銀さんだったから無事だったものの

最近はいろいろ流行ってるからなー

俺が親父だったら殺しにいくね、そいつを。

鼻の穴に指をかけて背負いなげす……」

今まで淡々と語っていた銀時の言葉が切れる。

ただ一人、違う方向を見ていた（攘）高杉は銀時をみた。
見て、驚愕した。

新八が銀時の言った事を実行したのだ。

新「うおりゃああ!!」

新八の指はいつたいたうなっているのだろうか。鼻の穴にかけ銀時を投げ飛ばした。

トイレに入るときは…2（後書き）

夏休み中の投稿がきびしいです…

携帯での投稿も難しいですね・・・

またあとでP Cのほうで直したいと思います

トイレに入るときは…3 (前書き)

塾の宿題が…orz

一週間で1、2年の総復習とか私には無理です!!

そういうわけでもものすごく間をあけてしまいましたが一週間にききました

お気に入り登録している方が増えていてびっくりです！
ありがとうございます

トイレに入るときは…3

銀「いだだだだだ!! とれた!!」

これ絶対鼻とれた!! 何しやがんだア!!」

(攘) 高「……」

新八の鼻フックにより投げ飛ばされた銀時は痛みに耐えている。

新八が、銀時の態度が貫にさわったのだろうことは誰にもわかったがあの痛そうにする銀時の姿をみて

(攘) 銀「…俺、やだな……」

(攘) 桂「…ものすごく痛そうだな」

(攘) 銀「だな」

(攘) 銀時と(攘) 桂は小声で言い合っていた。

いつか(攘) 銀時たちはもとの時代に帰り、時が経てば今のような状況になるかもしれないからだ。

まあ、戻ればの話だが……

新「見損ないましたよ!」

アンタ、神楽ちゃんの気持ちとか考えたことあるのかよ!!」

このままでは延々と終わらないのではないかと思ひ

(攘) 桂が落ち着けと言うが、二人はきこうとしない。

銀「あん!?! 家出娘を親のもとに返して何がワリーんだよ!」

新「お前は…」

銀時のあまりのわからなさに呆れきった新八は(攘) 銀時達の方を向き、

新「短い期間だったけど、あんたらも一緒にいて

神楽ちゃんがここをどれだけ大事に思ってるかくらいは

わかってるだろ! それと同時に万事屋だけじゃなくて…」

新八の頭に、あの日の、銀時が記憶を失って

万事屋が解散の危機に陥った時に神楽が言った言葉が浮かんだ。

神「最後まで木と
一緒にいるネ」

……。

新「あんたらや…
アンタを……」

新八は自分の目頭が熱くなるのを感じた。
何故銀時だけでなく彼ら、三人はあまり言って来ないのか。

神「江戸が焼けようが
煮られようが、関係ないネ」

新「でも、この人だけは
撃っちゃ困りますよ」

……。

(攘) 銀「新ば 新「もういい」…お、おい！」

新八は彼らに背を向けたかと思えば玄関へと向かっていった。
向いながら…

新「僕もやめさせてもらいます」

仲間だと思ってたのは
僕らだけだったみたいですね

そういった。

（攘）銀桂高「……」

彼らは新八をみて、かけていい言葉がでてこなかった。

銀「やめたきゃ、やめな」

銀時が言うと、新八は歩みを止めた。

銀「てめーも神楽も

こっちから頼んできてもらった

覚えはねエよ」

その言葉をきいてから、新八は静かに出ていった。

新八が居なくなったことで少し寂しくなった万事屋。

過去の三人は、新八の気持ちもここの銀時の気持ちも少しながら分かっていた。

わかるからこそ、どう声をかけるべきか悩んでいた。

最初に動いたのは（攘）銀時だった。

（攘）銀「：俺、ちよつと出てくるわ」

そういつて彼もまた静かに出ていった。

また静かになった万事屋。

そんな静かな中、声がした。

銀「…お前らはいかねえの……って無理か」

声の主は銀時だ。

（攘）銀時がここから出たならばあとの二人も行くと思っていたが、外に出るなど行ったのは自分等だ。

二人は指名手配犯予備軍みたいなものだろう…

銀「いてて、腰が…」

そういつて立ち上がると、定春が銀時達をじっと見ているのに気がついた。

（攘）桂「…どうした？」

声をかけると定春は銀時の元へとよっていく。そして彼の裾に鼻をあてた。

銀「んだよ…」

そんなところに誰もいねーよ」

定春が裾から離れると…

（攘）高「…手紙、か？」

口に手紙らしきものをくわえていた。

銀「アイツの臭いでもすんのか。」

……なあ、これでよかったんだよな」

銀時はしゃがんで定春から手紙を受け取ると、まるで自分に問うかのように

銀「俺、親子ってのがどーいうものかなんて

よくわからねーが……これでよかったのさ」

その問いにこう答えた。

それを二人は、黙って彼をただみていた……

トイレに入るときは…3 (後書き)

小説のタイトルを意味不明な二次創作にとっても変えたい
さいきんの暇人じゃない暇人なのでした……

トイレに入るときは…4（前書き）

ものすごく間を開けてしまっすみませんでした!!

携帯から投稿しようかとも迷ったのですが、

読みずらくなっていたことがあったためしませんでした、

では、その4です…

トイレに入るときは…4

（攘）銀時は万事屋を出ると新八を探し始めた。

まだ出ていってそんなに時間は経っていないため、まだ万事屋の当たりには居そうだが……。下に降りてどっちに進むか悩んでいると一階にある、スナックお登勢から人が現れた。

登「あんた、そこで何してんだい？」

お登勢は万事屋に過去から来た彼らのことを知っている。

妙の卵焼き事件の次の日に、家賃回収に来たときに会ったのだ。

（攘）「あ、新八がどこに行ったかわかりますか」

お登勢は店にいたようだが、もしかしたら知っているかもしれない
と思

訊いてみる。すると、

登「……あんたら、なんか有ったのかい？」

よくはわからないけど、ターミナルの方へ行ったよ」

お登勢はおそらく新八が行った方を向き、ターミナルと呼ばれる大きな建物を見て言った。

（攘）銀時は礼を言って、ターミナルへ向かって走り出した。

走ってどのくらいだろうか。あまりしないうちに、前方に新八が見え始めた。

（攘）銀時は少し走って距離を縮めてから大声で新八に呼びかけた。

（攘）銀「オイ！新ぱっつあん！！」

新八は銀時だと思って「あ？」と険しい顔をして言って振り向いたが、（攘）銀時だと

わかると今度は何しにきたんだという表情になった。

新「何しに來たんですか？」

新八が（攘）銀時に問う。

彼は万事屋に残っていると思ったからだ。

そんな新八に（攘）銀時はため息をつくと、

（攘）「一緒に神樂んところ行って悪いかよ」

そう言った。その言葉に新八は信じられないと言った顔をしたがすぐにこう返した。

新「……行こう！」

新八自身、彼、（攘）銀時もこの銀時と同じだと思っていた。

が、それが同じでも全てが同じじゃないんだと思い直した。

そして二人は、急いでターミナルへと向い始めた。

まだ間に合う、そう信じて……。

ターミナルへ着いて早々、問題が起こった。

一つ目は、神樂達を乗せた飛行船がもう出るということ。

二つ目は、搭乗口がわからないこと。

三つ目は、搭乗口がわかってしまっは遅いことだった。

（攘）銀「どうする？搭乗口わからないんじゃ
行きたくても行けねえじゃん」

（攘）銀時はそう言うが新八は聞いている。

新「……多分こっちだ」

しかもそう言って走り出してしまった。

（攘）「ま、待てって」

新八が向かった方へと走って行くと、ある飛行船の搭乗口に着いていた。

どうするんだ？と新八に訊けば……。

新「神楽ちゃん達を乗せた飛行船が出るって言うなら、もうそこに行けばいい……」

（攘）銀「……へ？」

どうやら搭乗口を超えて飛行船が出るところへ行くようだ。

そこはさすがに危ないだろうと（攘）銀時は思ったが、神楽に会うことは

できなくとも、思いを伝えるためには行くしかないと思を決した。

（攘）銀「ぱっつあん、俺がこいつら相手にすっから

お前が行け。いいな？」

従業員だろう。

出発口？発射口？

よくわからないがそこへ行くには彼らを越えなくてはならない。

彼らを（攘）銀時が抑えることとして、新八を行かせることにした二人は

一斉に搭乗口へと向かった。

（攘）銀「行くぞっ！」

トイレに入るときは…4（後書き）

いろいろと修正したりしました；

よかったらどこを修正したのか探してみてください

それから、次の更新は9月からになりそうです…

30日に学校にて実力診断テストを受けてくるので

その勉強を少しでもやろうかなと；

しかも始業式早々授業が＜＜

それでも夏休み課題テストがツorz

そういうことでまた間があきますが、よかったら

これからもよろしくお願いします

トイレに入るときは…5（前書き）

遅くなってすみませんでした；

1週間に1つは更新できるように頑張りたいです

が、まさかの体育祭がΣ（。д。111）

10月には定期テスト、実力テスト、英検、学校の行事……
イベントが沢山orz

更新がどんどん遅くなって行きますが
頑張りたいと思います…

では、短いですが続きます

※携帯からの投稿です

トイレに入るときは…5

万事屋を出た（攘）銀時が新八を見つけた頃、神楽は船に乗っていた。

その表情はどこか寂しげで

父親と帰ることにいまだ迷いを感じているように見える。

「転送中に、機体が揺れることもございます。

しっかりとシートベルトを腰に……」

船内にアナウンスが入る。

どうやら出発するようだ。

神楽は一人でアナウンスを聞き流すと

下を向いて呟いた。

神「……銀、ちゃん。新八ィ……、定春……」

少女の言葉は、誰にも聞かれることはなかった。

その理由の一つに、本来なら

神楽の隣に座っているはずの

星海坊主がいないのだ。

彼は何をしているのかというと、

乗務員「お客様困ります」

客室乗務員と共に、後方の

扉の前で立っていた。

もうすぐ船が出るというのに、何をやって

いるのだろうか。

乗務員「安定空域に達するまで

座席に座っていただかないと……」

彼のそばにいる乗務員が注意をするが

星「いやいやいやいや、無理！

これ無理！」

無理だそうだ。

一体何が無理なのだろうか。

星「俺の中の船も出航するって！！

ボンボヤージュ！」

乗務員「いや、全然うまくありません

お客様」

星海坊主が腹辺りを押さえているのをみると

トイレを使いたいらしい。

乗務員に対し何か言っているが、よくわからない。

星「無理だ！もらすぞオオ

今ここでもらすぞオオ！！」

乗務員「だからうまくありませんよ

お客様！」

遂に我慢できなくなったのか

星海坊主は扉を思いきり開き、更に奥の扉を横に引いた。

が、星海坊主が扉を引いた先には

額から触角の生えた、バカな皇子こと

ハタ皇子がすでに使用していた。

ハタ「……」

星「……え、誰」

トイレに入るときは…5 (後書き)

今回もありがとうございました

次回はちゃんと(攘)の方たちだせるでしょうかね……

トイレに入るときは…6 (前書き)

すみません

過去三人はでてきません

トイレに入るときは…6

星海坊主がハタと対面していた頃、

「ちよつとオオオオオオオ！！

何してんですかアア

皇子の宝物がアア！！」

貨物庫にて、従業員が叫んでいた。

事の始まりは、ハタの側近が原因だ。
それは……。

「くらアアア！！

ちゃきちゃき働かんかい、クソがアアア！！」

貨物庫にて、声を張り上げて従業員二人に指示しているのは

ハタの側近の老いた天人である。

「その荷物はそこ！」

アレはそこ！

そこはアレ！

アレは何、ここはどこ!？」

あまりにも大声で指示し続けていたせいかはわからないが、混乱してしまっていた。

そんな彼の指示をききながら作業していた二人は愚痴をこぼしながらも、休まずに働くのであった。
従業員A「にしても気味悪いな。」

この荷物はあの皇子のか？」

従業員B「趣味悪いコレクションだな。」

噂通り、バカ皇子のらしい」

従業員は荷物を見て、そう言った。

確かに見ていて気持ちの良いものではない。

なにしろ中身は、エイリアンなのだから……。

爺「丁重に扱えよ。」

これらは全て、皇子の宝物だ。

キズ一つでもつけたら

貴様ら身も心もキズだらけに

の　じいやがよォ！」

してやるからな、こ

喋りながら作業をする彼等が気に入らなかったのか、側近は煙草を

吸いながら従業員等を脅すが

普通に返事を返されるだけであつた。

爺は「……じゃあ　俺はとりあえず戻るけどよォ。

俺が居なくなつてから悪口とか言ってみろよ？

マジ、ブツ殺すから

気をつけろよ」

そしてカッコつけたように

そう言って貨物庫を後にしようとした時

まさかの事態が起きてしまった。

側近が段差につまずいたのだ。

そのまま皇子のコレクションに

ぶつかり、衝撃に耐えられなかったコレクション容器は
割れてしまう。

従業員達「ええええええ!!」

トイレに入るときは…7 (前書き)

いつものように短いです；

あ、いつもより短いですかね…

※今回も携帯からの投稿です

トイレに入るときは…7

従業員A「何してんですかアア！」

皇子の宝物がアア!!」

床に散らばる、皇子のコレクション容器の破片。

爺「チッ

邪魔くせーな、ガラクタか」

しかも壊した本人は、特に慌てる様子もなく

皇子のコレクションをガラクタ呼ばわりする。

従業員B「今邪魔くさいって言ったよ！」

皇子の宝物、ガラクタって言った!」

従業員達は、側近の言葉に驚きながらも

破片の後片付けをする。

側近は側近で、皇子の宝物をガラクタと言った後

ゴミとまで言ってみせた。

爺「早く片付けろ！」

バカにバレたら、ことだ!

さっさとモップ!モップ……ん?」

すると、側近はあることに気がついた。

爺「あ、アレ？」

中身、どこいった?」

そう。

容器に入っていたものが無くなっていたのだ。

従業員A「え？」

知りませんよ。なにか入ってたんですか」

爺「確か、そこにあるのと

似たようなのがあったはずなんだが……」

従業員B「えゝ!？」

そんな化け物が！」

従業員等に問うも、彼等は知らないようだ。それにしても、どこにいったのだろうか。

動くはずはないのだが……、動くはずは……。

そんな時だ。三人の頭上で、何かが動いた。

彼等が上を見上げてみれば、そこには

あの銀行で騒ぎを起こしたエイリアンがへばりついていた。

（攘）銀「くそっ！

通せ、よっ！」

新八と（攘）銀時は、搭乗口手前で

係員等に捕まり、搭乗口の向こう側、神楽が乗っているだろう飛行船まで辿り着けないでいた。

トイレに入るときは…8 (前書き)

いつもありがとうございます

トイレに入るときは…8

係A「ちよっ…

ここから先はチケットがないと
通れないの!!」

係員の制止も聞かずに、登場口へ向かっているのは
新八と(攘)銀時である。

新「話を…話をきいてください!

あの、アレ…、恋人が!!

僕の恋人がバーコード頭のオッサンにとられて
二人でハネムーン決め込もうとしてるんです!」

(攘)銀「そうそう、彼女が……って!ぱっつあん!!

俺はどうすんだよ!あ、つ、付き添いだ

!コノヤロー」

もうグダグダである。

係A「嘘をつけエエ!

君は彼女なんかいなそうだぞ。

いない歴16年そうだぞオ!!」

係B「それに白髪の子なんか

友達少なそうだぞ!本当に付き添いなのか!!」

しかも係員達は痛いところをついてきた。

新「どーいう意味だ、それエ!

なんで歳までわれてんだア!!」

(攘)銀「俺にだって友達くらい……

い、いるに決まってるだろオ!!」

(攘) 銀時は言っていて自信が無くなっていた。

自分の周りにいる人は長髪馬鹿、チビ、バカぐらいだ。
あ、まとめるとバカしかない……。

新「ウソウソ、今のは見栄はっちゃって

実はそのバーコードは僕の父親で」

(攘) 銀「そうそう。

かの…じゃなくて女の子と心中しようと

してんだ」

今度はいけるだろう……。

二人はそう思った、が。

係A「嘘をつけエエ

君の父親は死んでるっぽいぞなんか!」

今度も見破られてしまった。

新「だからなんで、われてんのオ!

なんでしてんだよオ!!」

(攘) 銀「こえーよ、係員!

なんでわか

んだよ!

てか、親父さん亡くなったのか」

なぜか二人について知っている係員。

だが、だからと言って調べていたわけではない。

彼等も勘で言っているのだ。

(攘) 銀「あーもう、行け新八!

神楽に顔でも見せてこい!!」

このままでは飛行船は出てしまうだろう。

それでは神楽に会うどころか

顔すら見せることができなくなる。

(攘) 銀時は新八に告げて、係員等に

一人で立ち向かおうとしたときだった。

新八は両の人差し指と中指を係員等の鼻に入れると

勢いよく係員二人を投げとばした。

新「…………ふう。

行こう！」

（攘）銀「あ、ああ……………」

トイレに入るときは…8 (後書き)

9月の更新は多分ありません；

10月も、行事やらテストやらで
あまり出来る気がしません…。

すみません……

トイレに入るときは…9 (前書き)

ま、間に合ったーッ!!

銀さん! 誕生日おめでとう!!

そしていつも通り、携帯から失礼します。

トイレに入るときは…9

このままずっと、三人一緒…。

そんなことは

無理だなんてわかってる。

きつといつか、別れの時がくるのは

わかってる。

でも……。

まだ、今は……

新「神楽ちゃん！」

（攘）銀「神楽ー！」

物思いに耽っていると、現れるはずのない二人が
窓越しに見えた……。

（攘）銀「ちょ、オッさん放せて！」

新八達は、係員を連れながらではあったが
なんとか神楽の乗る飛行船に追いつくことができた。

実際にははしごを登っており、飛行船内には入っていないが。

新「銀さんになに言われたかしらないけど

あんなのの言うこときかなくなっちゃっていいって！」

(攘)銀「あんな俺の言葉なんか気にすんなって！」

お前がいねーと万事屋って感じしねーよ！」

飛行船に乗る神楽に届く声。

一度は諦めた万事屋へ帰ること。

神楽の心は新八と(攘)銀時により、揺れていた。

新「僕一人じゃあの銀さんは手に負えないよ！」

それから人も増えたしね！

だから……、帰るなよオ！！まだ一緒に万事を屋で働こうよ！！」

先程まで深く考え込んでいた自分がバカみたいだと神楽は思った。

まだあの場所で、あの万事屋で働きたい。

万事屋に居たい……。

けれど、今更戻ったって……。

神楽は目に涙を溜めながら窓の向こうの二人を見る。

そしていつの間にか戻っていた星海坊主も、彼等を見ていた。

星「…なんてバカなマネを」

神「…ち、…ぱち。……」

トイレに入るときは…9 (後書き)

神楽に、(攘) 銀時はなんと呼ばれるか
何か希望のある方は、感想などをお願いします (^| ^;))

明日実力テストだorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6551t/>

昔と今 昔は今 （銀魂二次小説です）

2011年11月16日09時57分発行